

# 教育研究創発国際研修における学術活動報告書

令和 5 年 3 月 2 日

氏名 辻 優太郎

所属 学校開発政策 コース

指導教員名 村上 祐介 准教授

1. 研究課題 Unfair Competition?: A New Performance-Based Funding for National Universities in Japan

2. 報告する学術活動の実施期間 令和 5 年 2 月 21 日 ~ 令和 5 年 2 月 24 日

3. 日本学術振興会特別研究員 (DC) の現在の採用状況 DC1 DC2 採用無し

## 4. 学術活動

- 国外 国内
- ①英語論文公表
- ②研究科教員の研究プロジェクト参加
- ③フィールドワーク
- ④国際会議 (研究発表 運営補助 出席のみ)
- ⑤研究会 (研究発表 運営補助 出席のみ)
- ⑥研究指導委託
- ⑦留学
- ⑧国際研修
- ⑨国際インターンシップ
- ⑩その他 (具体的に: )

5. 学術活動実施の概要

※上記4で選択した学術活動について具体的に記載してください。括弧内の概要を必ず記載してください。

- ① 英語論文公表  
(著者、発表論文名、掲載誌名等、発表年月巻号、発表年月日等、論文内容の概要)
- ② 研究科教員の研究プロジェクト参加  
(プロジェクト名、代表研究者名、自身の具体的な活動、活動期間(年月日)及び活動頻度、プロジェクトの概要)
- ③ フィールドワーク  
(調査先機関等、国名・都市名、具体的な活動、活動期間(年月日)及び活動頻度、調査先の概要)
- ④ 国際会議  
(研究発表・運営補助・出席のみ の別、学会・会議名、国名・都市名、発表題目名、発表形式(口頭・ポスター等)、発表年月日、発表内容等の概要)
- ⑤ 研究会  
(研究発表・運営補助・出席のみ の別、研究会名、国名・都市名、発表題目名、発表形式(口頭・ポスター等)、発表年月日、発表内容等の概要)
- ⑥ 研究指導委託  
(派遣先機関、国名・都市名、受入身分及び研究、研究テーマと受入教員、受入期間(年月日)、具体的な研究活動、研究発表内容等の概要)
- ⑦ 留学  
(派遣先機関、国名・都市名、受入身分及び研究科、受入期間(年月日)、具体的な履修状況、研究発表内容等の概要)
- ⑧ 国際研修  
(プログラム名、派遣先機関、国・都市名、派遣期間(年月日)、プログラム概要、研究発表内容等の概要)
- ⑨ 国際インターンシップ  
(プログラム名、派遣先機関、配属部署、国・都市名、派遣期間(年月日)、具体的な活動、プログラム内容等の概要)
- ⑩ その他(具体的な活動、活動期間(年月日)及び活動頻度等の概要)

学術活動区分 (①～⑩を記入)	⑧
<p><b>【プログラム名】</b> 2022年度「グローバル・リーダー育成：欧州研修プログラム」国際学術交流会 (Education for Sustainable Societies in a Changing World)</p> <p><b>【派遣先機関】</b> 東京大学教育学部・教育学研究科、ストックホルム大学教育学部 共催</p> <p><b>【国・都市名、派遣期間】</b> 日本・東京(東京大学本郷キャンパス等) 2023年2月21日～2月24日</p> <p><b>【プログラム概要】</b> 本プログラムは、教育分野において国際的に活躍する指導的人材を育成することを目的として、東京大学教育学部・教育学研究科と、協定校であるスウェーデンのストックホルム大学教育学部との共催で実施されるプログラムである。今年度は、新型コロナウイルス感染症拡大や欧州を取り巻く情勢の影響により、東京大学本郷キャンパスにおいて対面で開催された。</p> <p><b>【研究発表内容等の概要】</b> プログラム2日目である2月22日の Student Session において、以下の発表を行った。  <b>題目：Unfair Competition?: A New Performance-Based Funding for National Universities in Japan</b>  <b>要旨：</b>高等教育機関に対する競争的資金配分が世界的な広がりを見せる中で、日本の国立大学に対しても、財政支援の中核である国立大学法人運営費交付金において、事後的業績評価に基づく配分が導入されている。特に2019年度から開始された「成果を中心とする実績状況に基づく配分」は対象となる経費の額、方法共に従来の配分とは性質を異にするものである。本発表では、従来明らかになっていない同配分の結果について、入手した資料を基に、学部構成等を基にした大学特性別に整理した上で、高等教育機関への資金配分一般に関する示唆を議論した。</p>	

- (注) ① 年月日は西暦で記入してください。  
 ② 英語論文発表については報告する学術活動において発表又は受理されたもの。  
 ③ 上記に記載しきれない場合は、ページを追加しても差し支えありません。  
 ④ 複数回の学術研究活動による報告の場合、適宜本ページを追加し、2つ目以降についても必要な内容を網羅してください。

## 6. 学術活動による成果

※報告する学術活動について、教育分野における国際的リーダー人材の育成とその研究成果を海外に発信することを目的とした教育研究創発国際研修の趣旨に照らし、その成果を具体的に記載してください。学術活動により得られた自身の研究課題につながる成果についてもわかるように記載してください。

※本欄に書ききれない場合、ページを追加しても差し支えありません。

本国際研修への参加の成果は以下の3点にまとめられる。

第1に、研究発表の内容を準備する上で、自らの研究対象が世界的な政策動向の中でどのように位置付くのかという点をより理解することができた。自らの研究課題で直接対象としているのは日本国内の政策であるが、Performance-based funding の導入は世界的な動向であり、この理解は今後の研究発表や博士論文の執筆等で不可欠である。本研修における発表の聴衆のうち、特にストックホルム大からの参加者の国籍は多様であり、日本の事情を初めて耳にする場合が多いことは言うまでもない。従って、そうした聴衆にも理解してもらえるよう、日本語以外の文献も調査した上で、簡潔かつ平易にその文脈に日本の事例を位置づけた。結果として、日本の位置付けを見直すことができ、研究課題で主に対象としている政策形成過程だけでなく、その内容に関しても改めて視野を広げることができた。これを基に今後、日本の Performance-based funding の特徴についても考察を進める予定である。

第2に、英語によるプレゼンテーションを実施する能力を大幅に向上させることができた。過去2回このプログラムに参加した経験があるが、1回目は初めての英語による発表であったために思うような成果を得られず、2回目はその経験を踏まえて若干改善できたもののオンラインであったため、対面での発表並びに質疑応答等を十分に行うことはできていなかった。従って、今回が対面による久々の英語発表であった。今回は英語によるプレゼンテーションの技術向上を目指し、本研究科の English Support Desk のアドバイスも受けた上で、上述のように海外の聴衆にも平易に理解でき、関心を向けられるプレゼンテーションを目指した。結果として、参加学生・教員から、面白い発表だったという感想を複数頂戴することができた。加えて Q&A セッションにおいては、配分に用いられている指標の詳細、大学特性と配分結果の関連について質問を得たが、これらにも概ね応答することができた。さらにその後のレセプションにおいても、発表内容に関する議論を行うことができた。以上のように、入念な準備の下に臨んだことで、英語による研究発表の能力を向上させることができ、今後に向けた自信を得ることができた。これは、研究課題を進展させる上で、発信先の候補を広げる経験であった。今後は、発表内容を基にした論文投稿を検討するなど、英語によるさらなる研究成果の発信を計画する。

第3に、海外の学生・教員との交流を通じ、海外における研究活動に関する情報が収集でき、海外渡航への意欲を高めることができた。海外渡航については従来から漠然と考えており、新型コロナウイルスの影響で全学交換留学が中止となるなど機会に恵まれていないのが現状であった。しかしストックホルム大学からの参加学生は、様々なバックグラウンドを有しており、国境を超えた活動に意欲的な学生が多く、自らも具体的に計画するとともに実行に移す必要性を感じた。今後は、上述の研究成果の発信に留まらず、在外研究の手段・期間等を具体的に検討し、博士課程在籍中の渡航を目指したいと考えている。

以上のように、本国際研修への参加によって、研究課題への理解が進展し新たな視点を得るとともに、英語による学術研究活動の能力及び意欲の向上という成果を得ることができた。